

平成 22 年 7 月 7 日

2010年度ケルン体育大学特別研究プロジェクト
「国際社会における文化的輸出としてのドイツのスポーツシステム」
に国外メンバー（客員教授）の一人として参加

- 1 . ケルン体育大学から届いた客員教授招聘の文書 配布資料 1
- 2 . ケルン体育大学の概要
ヨーロッパ最大のスポーツ系大学（学生数7000人、50以上の大学と国際交流協定を締結、
外国人留学生は65ヶ国から約480人が学んでいる）
- 3 . 第142回国会 参議院文教・科学委員会会議録第 5 号
（平成10年 2 月12日） 配布資料 2
- 4 . スポーツ議員連盟「新スポーツ振興法制定プロジェクトチーム」の会合で講演
（平成20年 6 月 5 日） 配布資料 3
- 5 . 「スポーツ立国戦略」策定に向けたヒアリング（第 5 回）会議で報告
（平成22年 4 月22日） 配布資料 4
- 6 . クリストフ・プロイアー、黒須 充編著「ドイツ社会とスポーツクラブ(全 3 巻)」
第 1 巻（平成22年10月出版予定） 配布資料 5

（お問い合わせ先）
福島大学人間発達文化学類
教授 黒須 充
電話：024-548-8220
E-Mail: kuro@educ.fukushima-u.ac.jp

【本の概要】

序章 なぜ、ドイツのスポーツクラブは150年以上も続いているのか？

ドイツには約9万のスポーツクラブがあり、その会員数も2700万人を超え、国民のおよそ3人に1人は、身近な地域のスポーツクラブに所属しスポーツを楽しんでいる。なぜドイツでは、地域のスポーツクラブがこのようにダイナミックな発展を遂げ、高い社会的評価を得ることができたのだろうか。その答えは、ドイツのスポーツクラブは、輝かしい伝統を築き上げてきたにもかかわらず、いまだに若さ(変革の意欲)を保っているという点にある。

第1章 公益の担い手としてのスポーツクラブ

ドイツのスポーツクラブとは、単にスポーツを行う組織ではなく、地域住民が世代を超えて集う、極めて公益性の高いクラブとして、様々な社会問題や生活課題の解決にも大きく寄与する力を備えている。

第2章 健康増進の機会を提供するスポーツクラブ

ドイツではスポーツクラブ全体の約30%に当たる27,300のクラブが、転倒予防の専門的トレーニング、精神運動療法、心臓循環系トレーニング、脳卒中、骨粗しょう症、癌、強直性脊椎炎、動静脈系の病気に対するリハビリテーション、整形外科用スポーツ、心臓循環系スポーツ、療法的・矯正的スポーツ、さらには目の不自由な人や身体障害者、精神障害者、車椅子スポーツのためのコースなど、健康に関連したプログラムを提供している。

第3章 競技力向上とスポーツクラブ

スポーツクラブを抜きにしてドイツの競技力向上を考えることはほとんど不可能であろう。ドイツ全体で13.7%のスポーツクラブ、つまり12,400のスポーツクラブがカーダーをもった強化選手を会員として抱えている。それゆえドイツの組織スポーツは自由時間を利用したアマチュア組織として戦後最も大きな成果を挙げてきた組織であるだけでなく、競技能力を次世代に伝え、地域及び国民を代表するものとして利用することのできる最も広範なネットワークのひとつともなっているのである。

第4章 女性の積極的参与とスポーツクラブ

ドイツのスポーツクラブは、ほぼすべての年齢層において女性会員の比率をアップさせることに成功している。現在、女性の会員数は一千万人に迫ろうとしている。また、ドイツのスポーツクラブでは、67万人の女性がボランティアとしてクラブを支えている。内訳を示すと、26万人が組織運営ボランティア(理事や運営スタッフ等)として、41万人がスポーツ指導ボランティア(指導者や審判等)としてクラブを支えている。

第5章 社会統合とスポーツクラブ

近年の国際化を背景として、他国からの移民を社会に統合するという点でスポーツクラブの果たす役割が益々重要になっている。これもスポーツクラブの公共の福祉に対する貢献の一面を表している。ドイツのスポーツクラブ会員の10%は他国からの移民を背景に持っている人々が占めている。

第6章 社会的機関とスポーツクラブとの連携

スポーツクラブの3分の2以上が学校と、47%が幼稚園・託児所と、36%が青少年課と何らかの形で協力関係にある。たとえば、幼稚園・託児所、小学校とスポーツクラブが連携し、子供の運動能力の低下や肥満防止の施策を展開することや、病院や健康保険会社とスポーツクラブが協力し、心臓病の患者に対し個々の症状に合わせた適切な運動メニューを作成し、治療、再発防止に取り組むなど、社会的機関との連携を深めている。

終章 日本のスポーツの将来的展望

本書を通して、日本の地域スポーツクラブが組織的基盤を整え、公益的存在として活動を展開していくためにはどうすればいいかなど、スポーツクラブも含めた組織的スポーツの決定責任者に戦略分析およびマネジメントに関して重要な情報を提供できるのではないかと考える。

なお、本書は全3巻シリーズで出版する予定となっている。

クリストフ・プロイアー、黒須 充編著『ドイツ社会とスポーツクラブ 実践事例編』 2011年8月出版予定

クリストフ・プロイアー、黒須 充編著『ドイツ社会とスポーツクラブ 理論編』 2012年6月出版予定

編者プロフィール

クリストフ・ブロイアー（Christoph Breuer） ケルン体育大学スポーツマネジメント学科主任教授



1971年、ルートヴィヒスハーフェン・アム・ライン生まれ。33歳の若さでケルン体育大学の教授に就任。現在は英語のみで講義を行う大学院（スポーツエコノミー & スポーツマネジメントコース）の責任者を兼務する。専門分野はスポーツ経済・経営学で、主として、1) 地域スポーツ政策、2) スポーツクラブのモニタリングシステム、3) スポーツ参与の社会経済学、4) スポーツ・スポンサーシップなどをテーマとした研究に取り組んでいる。特に地域スポーツ政策の分野では、ミュンヘン、シュトゥットガルト、ミュールハイムなど、多くの自治体のスポーツ政策に関して、実証的な調査研究に基づいたアドバイスを行っている。著書・論文など多数。

黒須 充（Mitsuru Kurosu） 福島大学人間発達文化学類教授

1958年福島市生まれ。福島高校卒、筑波大学体育専門学群卒業、筑波大学大学院修士課程体育研究科修了。専門分野はスポーツ社会学。文部科学省中央教育審議会スポーツ・青少年分科会専門委員、独立行政法人日本スポーツ振興センタースポーツ振興事業助成審査委員会部会委員、財団法人日本体育協会総合型地域スポーツクラブ育成委員会中央企画班班長、NPO法人クラブネッツ理事長などを務めている。ドイツのスポーツ事情に詳しく、「総合型地域スポーツクラブ」を基盤としたわが国の新しいスポーツシステムの構築を提唱している。主な著書に『ジグソーパズルで考える総合型地域スポーツクラブ』（編著）大修館書店、2002、『スポーツによる地域貢献で大学は変わる』（共著）大修館書店、2004、『現代スポーツのパースペクティブ』（共著）大修館書店、2006、『総合型地域スポーツクラブの時代（全3巻）』（編著）創文企画、2008-2010、その他、著書・論文多数。第7回（2004年度）秩父宮記念スポーツ医・科学奨励賞受賞。2006年度より、早稲田大学大学院スポーツ科学研究科の非常勤講師もつとめる。

